

序章

最高の技術者資格としての技術士



1. 技術者、この良き職業

技術者という職業は創造を本務とするすばらしい専門職である。それは新しい価値を創り出し、それを世の中に提供できる仕事である。価値の創造は芸術と技術において可能であり、われわれ技術者はその一翼を担う役割を果たしている。技術者という職業は自分を成長させ、社会に新しい価値を提供するすばらしい職業である。

技術者という職業は他の職業とは異なる多くの特権を保有している。ということ、とまどう方がいるかも知れない。医師や弁護士は職業そのものが独占権で守られているのに、技術者にはそのような独占権はないではないか、との反論があるかも知れない。しかし、次に示すとおり技術者という職業には多くの特権があるのである。

第一に、技術者となるには、若い時代に集中的に体系的な長期の教育を受けなければならない。若年の時代にトレーニングしなければ、十分な能力ある技術者になることはたぶん不可能である。要するに参入障壁が非常に高い職業である。それに対してたとえば法曹人となるには、中年以降に司法試験に挑戦して合格するという事例が多数ある。公認会計士しかり。医師でさえも中年くらいまでならば大学医学部に入って免許を取るという人が実際にいるのである。

第二には、技術の世界は工学を基礎としていることである。工学は自然の摂理に従う理論であり、人の都合は一切斟酌しない世界である。技術者は人の都合に絶対優先する発言権を持ち、人の力に左右されない仕事ができる。社長に対しても、技術的にできないものはできないと主張できるのである。要するに、技術者とはいわば自然という神の託宣を受け、代理人としてそれを執行する神官であり、神官に類する権限を持つのである。

第三には、今でこそまだ低い技術者の社会的地位は、産業経済の発展により、その役割が急激に増加しつつあることから、今後ますますその地位が向上する

ことは明らかだということである。技術者に倫理規範が求められることはその前兆であるだろう。

いまこの本を手にとっている読者は技術者という職に惹かれ、技術によって社会に貢献する道を選ばれているはずである。技術者という職業は、しかしながら、いまのところは社会においてその役割の大きさに比べて、恵まれることは少ない。だが、いまは技術者の特権は理念に留まるとしても、明日は現実の強みに変わるであろう。技術者としてのキャリアが10年を超える方は思い出して欲しい。その当時、社会の中で技術および技術者がどれほどの影響力を認められていたか。今日、それが持つ重みははるかに大きくなっていると感じるはずである。

技術者という職業はすばらしい職業である。

第1章

技術士制度の歴史と魅力



1. 技術士制度の歴史

—その1 創設から現在まで

わが国の技術士制度はコンサルタントの職業資格の側面を強く備えた制度として発足したが、2000年の法改正によって専門職技術者資格を定めるものと改正された。そして、その間も、その後も度重なる大小の改正が行われ現在に至っている。そのため制度は旧思想に基づくもの、新しい考えに基づくものが混在しているのが実情である。技術士制度の理解を深めるには、この制度のこれまでの歴史を知ること大切である（以下、『日本技術士会三十年史』、『日本技術士会三十五年史』、『日本技術士会創立五十周年記念誌』いずれも（社）日本技術士会編、に拠り整理した）。

（社）日本技術士会は、1951年6月14日に日本工業クラブにおいて誕生した。同年10月に発行された『日本技術士会会報、技術サービス』によれば、

「技術士会誕生

新しい日本に民主化が始まっている
産業復興は封建技術の打開にある
優れた技術を全ての企業に平等に
技術の民主化運動の旗は振られた
技術革命の先駆者その名は技術士」

と記載され、68年を経た今にまで、高揚した雰囲気を実に伝えてい

このときの会員資格は、技術士を本業とする者、非営利団体に属している技術指導者、営利団体に属していても、その団体の利益に関係のない技術指導者と定めている。これは技術士を独立した技術コンサルタントであると定義していることを意味する。そのために、会員には、営利団体からの独立性を強く求めている。これは、日本技術士会が米国のコンサルティングエンジニアおよび